

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 20 2016*

英語教師のための基本文献案内(4)

加 島 巧・川 島 浩 勝・藤 内 則 光
原 田 依 子・藤 原 和 政

The Selected Bibliographical Guide for Teachers of English (4)

KASHIMA Takumi, KAWASHIMA Hirokatsu
FUJIUCHI Norimitsu, HARADA Yoriko
FUJIWARA Masakazu

長崎外大論叢

第20号
(別冊)

長崎外国語大学
2016年12月

【書評】

英語教師のための基本文献案内(4)

加 島 巧・川 島 浩 勝・藤 内 則 光
原 田 依 子・藤 原 和 政

The Selected Bibliographical Guide for Teachers of English (4)

KASHIMA Takumi, KAWASHIMA Hirokatsu
FUJIUCHI Norimitsu, HARADA Yoriko
FUJIWARA Masakazu

Abstract

In what follows we offer the fourth bibliographical guide of five basic books for teachers of English. The first book was selected from Middle English Literature, and the second one and the fifth ones belong to the psychology. The third and fourth ones were chosen from English grammar and linguistics.

1. 『*The Riverside Chaucer*』KASHIMA Takumi
2. 『英語教育学と認知心理学のクロスポイント
—小学校から大学までの英語学習を考える—』KAWASHIMA Hirokatsu
3. 『*Aspects of the Theory of Syntax*』FUJIUCHI Norimitsu
4. 『格文法の原理 —言語の意味と構造—』HARADA Yoriko
5. 『教師のためのソーシャルスキル—子どもとの人間関係を深める技術—』FUJIWARA Kazumasa

序

将来英語教師を目指す学生や、現役の英語教師にとって有益な書物を一点ずる紹介する基本文献案内も4回目を迎えることとなった。まず、中世英文学の分野から、2冊目は、英語教育の分野ではあるが、心理学の側面も含んでいる。3冊目と4冊目の2冊は、言語学、英語学の領域の基本文献と言える。5冊目は、心理学の領域から選んだ。

1. Geoffrey Chaucer : *The Riverside Chaucer*

Oxford University Press, USA; 3rd Revised 版 ISBN-10: 0199552096 p.1327, 2008

(『チョーサー・ラブレー』 近代世界文学 1 筑摩書房 昭和49年 西脇順三郎 訳)

総序 (英語史の概略)

今回推薦する本は、ジェフリー・チョーサー (1340? - 1400) の『カンタベリー物語』ですが、その前に、まず英語史の概略を。

生きた言語は、絶えず変化し続けます。言葉の変化を見るには、二つの視点があります。一つは、言語そのものの変化で、これは内面史 (Internal History) と言われます。もう一つは、言葉の変化

に影響を与えた社会的な出来事から見る視点で、これは、外面史 (External History) と呼ばれます。

ブリテン島には、ケルト人が住んでいました。そこに、ローマ軍が定住を試みます。紀元前55、54年にはジュリアス・シーザーが来ますが、定住には至りません。その後、43年にクローディアス皇帝が侵略に成功し、410年に撤退するまでローマ軍が定住することになります。(ということは、英語にはケルト語とラテン語の要素が含まれているということになりますね。)

449年にアングロ・サクソン人が大陸から渡って来て、英語という言葉の歴史が始まります。ケルト人は、Wealas (よそ者) と呼ばれ、西へ西へと追いやられます。Wales や Cornwall という地名は、その Wealas に由来します。西へ追いやられたケルト人の一部は、海を渡り、フランスのブリタニー地方に逃れる者もいました。

その後、英語という言葉に影響を与える色々な出来事が起きます。例えば、597年にはキリスト教が伝わりますし、664年のホイットビーで宗教会議が開かれ、8世紀から11世紀に亘るバイキング(古ノルド語を使用するデーン人)の侵略、その中で、878年にはアルフレッド大王がウェドモア条約をバイキングと結び、デーンロー地域(現在のヨークから南、ロンドンの北の地域)が出来、そこにデーン人は定住することになります。英語は変化し続けます。この時代は古英語 (Old English) の時代と呼ばれ、屈折の豊富なことが、この時代の英語の特徴と言えます。古ノルド語 (Old Norse) からの借用語は、地名に加え、三人称複数代名詞があります。they, their, them のような基本語を他の言語から借用するといったことは、そうある事ではないでしょう。当然この借用語は北部から広まるのですが、チョーサーの英語は、これに関しては、まだゲルマン語の名残を残しています。(総序の11行目) 1016年には、デーン王カヌートがイギリス王になります。そこまで二つの民族は融合したのです。

1066年のヘイスティングズの戦いは、英語が大きく変わる契機となります。対岸のノルマンディからウィリアムはイギリスの王位を要求し、勝ち取ったのですから。時代は古英語から中英語 (Middle English) の時代となります。ブリテン島の公用語はフランス語になります。当然英語は、フランス語から大きな影響を受けることになります。そして、ジェフリー・チョーサーが登場することになるのですが、それは、中英語も後半のことになります。彼は英文学史上だけでなく、英語と言う言語の上でも大きな役割を演じることになります。

チョーサーとカンタベリー物語

チョーサー (1340-1400) は、英文学の父と称される人物です。祖父と父は、ロンドンでも豊かなワイン商人でした。彼は、今でいうところの公務員でした。テムズ川沿いにある税関で仕事をしながら、著作に励んでいたわけです。カンタベリー物語はその代表作と言えます。カンタベリー物語には、まず冒頭に858行の「総序」が物語の導入として書かれています。

四月は巡礼の月であります。テムズ川南岸に「陣羽織亭 (タバルド・イン)」がありました。そこにカンタベリーへの巡礼の旅に出る29名が集まります。宿屋の主人は、「だんな方。さあ、悪くとらずに聴いてくださいまし。だが馬鹿にしちゃいけませんよ。早く申せば、これがその要点でさ。道中を短くする料簡でカンタベリーへの旅の道草に、どなたも話を二つずつなさにきめましょう、ようござんすか。帰りの途でまた二つずつ、昔起こった事件の話を。で、みなさんのうちでいちばんうまくやってのけられた、つまり、いちばんためになり、またいちばん面白い話をなされた方はどなた

でも、カンタベリからのお帰りに、またここで、この場所で、この柱のところに坐られて、ほかのみなさんの費用で夕飯のご馳走をおごってもらうということにいたしましょう。」

一番くじを引いたのは、騎士でした。構想では、120の物語が語られることになるのですが、現存するのは、「総序」と24の物語です。チョーサーが『カンタベリー物語』に登場させた人物は、14世紀後半のイギリス社会を映し出す人々だったのです。(引用は西脇順三郎訳)

チョーサーはカンタベリー物語をイースト・ミッドランド方言で書いた

1066年のノルマン・コンクエストから1500年頃までの英語が中英語として時代区分されます。古英語の屈折語尾の豊富な言語から屈折語尾が徐々に水平化 (leveling: 水平化、単純化) して行くのが中英語の時代です。この時代に、チョーサーは英語で作品を書きました。彼の使用した英語はイースト・ミッドランド方言で、商業都市ロンドンやケンブリッジやオックスフォードの大学都市が含まれていたその方言は、1476年にウェストミンスターに印刷所を開設したウィリアム・カックストンがつづり字の固定化に貢献したように、標準英語の確立につながることになります。

英語は、その後も変化し続け、いよいよ1500年頃から近代英語 (Modern English) の時代へと移ります。そして、ウィリアム・シェイクスピア (1564-1616) が登場します。

ロンドンに行ったら次の所は、見逃さないように！！

1. George Inn (テムズ川南岸にある、Tabard 亭を彷彿させる所。現在は National Trust が管理している。)

The George Inn Yard, 77 Borough High St, Southwark, London SE 11 NH

<https://www.nationaltrust.org.uk/george-inn> (2016年9月11日閲覧)

2. Church's Shoes (チャーチ靴店) 90 Cheapside, The City, London, EC 2 V 6 EB

カンタベリーの大司教であった Thomas a Becket はこの近くで生まれた。この靴屋の壁には、それを表す青い記念銘板が埋め込まれている。

<http://www.blueplaqueplaces.co.uk/thomas-a-becket-blue-plaque-in-london-8815#.V9yeB1uLTIU> (2016年9月11日閲覧)

3. The Vintners' Company (葡萄酒組合) <http://www.vintnershall.co.uk/>

(2016年9月11日閲覧)

チョーサーの祖父と父は、葡萄酒を商っていて、裕福な家で育った。ロンドンの伝統行事の一つに Swan Upping がある。テムズ川の白鳥の所有を確認する行事で、毎年7月の第3週に行われる。白鳥は、葡萄酒組合と染物業組合が国王の所有権を分有している。テムズ川北岸の Upper Thames Street にある葡萄酒組合のビルの玄関には、白鳥の模様が描かれている。

Swan Upping については、以下の所を参照：http://www.vintnershall.co.uk/?page=swan_upping (2016年9月11日閲覧)

4. 桂冠詩人 John Gower (1325/30-1408) の墓がある Southwark Cathedral

<http://cathedral.southwark.anglican.org/> (2016年9月11日閲覧)

テムズ川南岸にあります。John Gower が枕にしている三冊の本に注目。

2. 太田信夫・佐久間康之（編者）『英語教育学と認知心理学のクロスポイント—小学校から大学までの英語学習を考える—』

2016年、北大路書房、305ページ、ISBN978-4-7628-2915-4

英語教育の低年齢化が進み、2020年度より公立小学校（5、6年生）において英語が正式に教科として教えられることになっている。このような流れを受け、現在、小学校から大学に至るまで様々な英語教育の改革がなされているが、改革を実りあるものにするためには、科学的な方法に基づき理論的研究と実践的研究を行い、それぞれの研究成果を高い次元で融合させていかなければならない。

例えば、英単語の学習とその記憶というコンテクストからも明らかであるが、英語教育学の領域と認知心理学の領域には重なる部分があり、英語教育学における理論的研究の中には認知心理学の研究成果をその理論的バックボーンとし、それを基にして実践的研究が行われることも珍しくなくなっている。しかしながら、英語教育学と認知心理学という2つの学問分野にまたがる理論的研究と実証的研究の間には齟齬があるようで、例えば、実践研究における研究計画や方法の不備が問題となったり、また、構築された理論が実際の英語学習を反映していないのではないかという声も聞かれる。

本書は、英語教育学と認知心理学における理論と実践のギャップをうめることを目的に書かれたもので、英語教育学と認知心理学の研究成果の統合を目指している。Part IとPart IIからなり、前半のPart Iでは、認知心理学の理論的枠組みと記憶にフォーカスを当てた英語教育学関連の研究が扱われている。後半のPart IIでは、認知心理学の理論や知見に基づいてなされた応用的英語教育研究の内容が報告され、それぞれの研究成果に対して、認知心理学の立場からフィードバックがなされている。

まず、Part Iを見てみよう。Part Iは6つの章からなり、教育における学習研究に関心をもつ認知心理学者がそれぞれのテーマで、英語教育学に関連させながら認知心理学の研究成果を述べている。

第1章（「認知心理学と教育—記憶研究を中心に—」）は、心理学を専門としていない読者向けに書かれている。認知心理学とはどのような学問であるか、また、認知心理学、特に、学習や記憶の研究の現状はどのようなになっているか、等について論が展開され、学習と記憶に関する基礎的な情報が得られるようになっている。章の最後では、記憶を強化する7つのルール（「いくつかの感覚や感情を働かせる」や「時間をおいて繰り返す」等）がコンパクトにまとめられている。

第2章（「学習と記憶実験—精緻化を中心に—」）では、実証的研究を基に、記憶の精緻化（学習情報に情報を付け加えること）の重要性とその特徴が、1）精緻化の有効性を決める要因、2）学習者による精緻化の生成・選択および修正、3）個人的エピソードに関する精緻化、の観点から考察されている。例えば、1）の要因に関しては、精緻化によって学習情報に付加される情報の質が重要で、特に、学習情報そのものを他の情報と弁別しやすくなる情報（差異性が高い情報）が有効であることなど、が論じられている。また、3）に関しては、学習において喚起される情動性が考察され、情動が喚起される情報は、喚起されない情報よりも記憶に残りやすいことが述べられている。

第3章（「潜在記憶と学習の実践的研究」）では、言語能力の基礎とされる潜在記憶（情報検索時に想起意識が伴わない、定着された記憶）に関する新しい知見が紹介されている。例えば、実証的研究の成果を基に、感覚情報（意味のないメロディ等の聴覚刺激）に基づく潜在記憶は長期間保持され、その情報が後の学習に役立つ可能性があることが論じられ、次のような見解が述べられている。

これ（感覚情報に基づく学習）からすると初めて学習する英単語はもちろん、聴き取れず、意味がわからないネイティブのリスニング教材に触れることも、長く保持される知識の獲得に役立つといえよう。小学校時代に、聞き取ることもできないリスニング教材に触れることが、その子の中学校でのリスニングに効果を発揮することは十分考えられる（p. 43：括弧内は筆者）

第4章（「ワーキングメモリと学習活動」）では、学習活動において重要な役割を果たしていると言われている作動記憶（様々な課題を遂行する際、必要となる情報を一時的に保持しておく記憶システム、以下、ワーキングメモリ）の仕組みと働きについて説明がなされている。ここでは、実際の教育場面でも指摘されている、学習活動中に課題に集中できず、思考が逸脱しまう課題無関連思考（マインドワンダリング）の現象も取り上げられ、ワーキングメモリの観点からその特徴が述べられている。

第5章（「言語的短期記憶と英語の音韻学習」）では、幼児の音声言語の知覚、音韻分析、音声情報の保持・貯蔵の過程が、言語的短期記憶の観点から詳細に検討され、語彙獲得における言語的短期記憶の重要性が論じられている。音声を聞き、短い時間、それを心に留めておきながら、繰り返すことを可能にしている言語的短期記憶システムであるが、外国語学習においても重要な役割を果たすと言われている。この章では、日本語母語話者による英語音声知覚や日本語母語幼児による英語の音韻学習についても言及がなされ、例えば、日本語母語幼児は、長い英単語を処理する際、日本語の影響を受けて（母音付加等で）、処理単位が増え、言語的短期記憶システムに負荷がかかり、記憶保持が難しくなり、単語学習が難しくなることなどが述べられている。

記憶に関する上述の研究を発展させ、システムとして英語学習を考えるためには、脳科学で得られた知見も取り入れる必要がある。第6章（「英語学習と脳機能」）では、先ず、脳の基本的構造や機能、また、脳機能の計測法に関して解説がなされ、次に、日本人英語学習者を対象として行われた脳機能研究の成果が紹介されている。これらの研究で明らかになったことの一つとして、次のようなことを挙げることができよう。

日本人の英語学習における英単語学習に限れば、英語に触れる年齢は遅い方が、より習熟度が高まり、脳内での英単語処理もより適切なものになる（p. 95）

以上がPart Iであるが、Part IIにおいて掲載されている英語教育学（外国語習得）に関する9つの研究の理論的バックボーンとなっている。Part IIは、全部で9つの章から構成され、認知心理学の理論研究をベースとしながら、日本人英語学習者を調査対象として行われた実証的研究の成果が報告されている。章の配列は、学習者の認知発達段階（小学校低学年から大学生）に即しており、また、各章末には、理論的枠組みに関係ある認知心理学者のフィードバックが載せてある。

9つの章に集録されている研究は、1）「小学校全学年の外国語活動経験者とワーキングメモリ内の認知的特徴」（第1章）、2）「外国語活動経験者の母語（日本語）および外国語（英語）におけるストループおよび逆ストループ効果：小学5年から中学3年の認知発達の特徴」（第2章）、3）「タスクの繰り返しと日本人高校生とスピーキングに与える注意焦点の変化」（第3章）、4）「英語指導における個人差の把握と介入」（第4章）、5）「英語リスニング不安とその対処方略」（第5章）、6）「インプット中心・アウトプット中心のフォーカス・オン・フォームの効果：言語学習と内容理解の

トレードオフ」(第6章)、7)「英単語学習過程としての「記銘」と「想起」の役割：手がかりとしての文脈か、符号化特殊性か」(第7章)、8)「ワーキングメモリ容量における言語産出および言語理解の維持可能性」(第8章)、9)「MEGによる第二言語語彙処理プロセスと習熟度に関する研究」(第9章)、で英語学習・指導を考える際、有益な情報を提供している。また、各研究に対するフィードバックを読むことにより、理論と実践の融合を深めるための視点を得られるようになっている。

ここでは、第1章「小学校全学年の外国語活動経験者とワーキングメモリ内の認知的特徴」の研究を取りあげる。この研究は、3年間に及ぶ小学校全学年生の英語活動が、どのような効果をもたらすのかを大規模に調査したもので、1)母語の注意力と母語の言語的短期記憶容量は外国語(英語)よりも優れていた、2)6学年の母語および外国語(英語)の短期記憶容量の例外を除き、二言語ともに注意力と言語的短期記憶容量は上の学年ほど高かった、などが結論として報告されている(pp.121-122)。この研究結果に対してフィードバックがなされ、研究デザインにおける英語学習への特化性の低さや、研究結果が学習の一般的原理で説明できる点が指摘されている。また、これと同時に、それらをクリアーしていき、英語学習に固有な特徴が見つければ、そのこと自体が認知研究に貢献するのではないかという見解も述べられている。

認知心理学と英語教育学双方の研究者によるコラボレーションは大変意義があり、本書が提供する知見や視点は英語教育学の発展に寄与し、特に、英語学習の本質にせまる実証的研究を行うための礎となるであろう。英語教育に携わる者にとって必読書である。

3. Noam Chomsky: *Aspects of the Theory of Syntax*

The MIT Press; 50 Anv Rep 版 ISBN: 0262527405 p.296, 2014

Aspects of the Theory of Syntax (以下本書)は、今現在の継続中のChomskyによる生成文法において、標準理論の解説となる重要な著書である。たとえ中学校の英語教師であったとしても、免許状取得のためには教科に関する専門科目が必修となっているはずである。そして、その専門科目にはまず間違いなく英語学に関する科目として英語学概論と調音音声学が含まれており、英語学概論の講義は生成文法を必ずその範囲に含めているはずである。その生成文法の講義は、よほど特別な環境になれば標準理論が対象となっているはずである。以前は伝統文法や構造主義言語学のみを学習して課程を修了した英語教師もいたと思われるが、今は恐らくそうではない。そして初期理論を除き、その後進化する生成文法理論を理解するのに、この標準理論の理解は必要なものである。また、本書の理解により、他の生成文法の解説書の理解も容易になる。最終的には、文法における英語の「なぜ」を説明的に教授することが可能となり、授業の魅力が増すことであろう。

なお、原書以外に訳書として研究社より『文法理論の諸相：安井稔訳』がある。

1. 本書の特徴

生成文法が他の文法と一線を画しているのが、記述的妥当性だけでなく説明的妥当性を達成しようとする姿勢であり、その方法論を解説するために、本書は注釈を除いたページ数の約1/3を方法論序説に割いている。本書の要はこの第一章であり、この章を見ずに先を読み進めても、深層構造と表層構造が仮定されている理由と、句構造規則と変形規則の存在意味を理解することができない。生成

文法の特徴となる用語や概念が、この章で解説されるので必読であるが、難解である。以下に概説するが、生成文法を一通り学習した経験があることが前提である。

1.1. 研究の前提

長らく言語学では実際の言語運用がその研究対象であり、生成文法の研究が言語運用に重きを置いていないことに対する批判があることは、本書でも紹介されている。本書の主張を約言すれば、これまでの言語運用の研究と研究者の言語学的直観があるにしても、それだけでは帰納的に言語能力の全容を解明することはできない、ということである。言語運用だけの研究では不十分であることから、言語の記述のレベルを意味を表示する深層構造と音声を表示する表層構造に分けたり、それらの構造を媒介する変形規則を仮定したり、深層構造を生成する句構造規則を仮定したりするのである。それらは生成文法の研究の正当化の一環として仮定されたものである。

1.2. 言語能力の研究

方法論序説では、多くの部分を言語能力の研究の正当化に割いている。生成文法は、言語習得は内在化されている言語能力によって自動的に行われると仮定しているが、それは当時当然だった経験的言語習得の観点からは大きく食い違うものであった。内在化された言語能力の研究の手法として、子供の言語習得の研究や言語普遍の研究が打ち出されたのである。

内在化された言語能力によって個別の生成文法が作られるという主張は、端的には、人間が用いる言語にはこれまで聞いたことがないものが含まれる、という事実によって支持されるが、同時に歴史が長い経験的言語習得を否定する必要もあり、そのために言語学だけでなく哲学や心理学も引用文献に含まれている。また、本書では構造の演算という言葉が使われる。例えば、説明的妥当性を達成する言語理論の研究の一環として、 $SD_{f(i,j)}$ というテンソル表記の関数が提示されるが、これはある言語の文法 G_j が生成する文 S_i の構造 SD を関数 f として表したものであるが、数理的な演算ではなく構造の特定を演算としている。

文法の生成能力にも区別がある。文法は構造を強生成し文を弱生成する。これは、直接構造を生成するので強生成し、その後語彙挿入によって文は結果として生成されるため弱生成、という理解で良いがこれも言語運用と言語能力の区別であり、これにより文を入力にして行われる経験的言語研究では十分に説明的に妥当な構造研究を正当化できない、と本書が帰結することも理解する必要がある。

2. 本書の理論の概要

2.1. 基底生成

本書の理論の枠組みでその後の研究が進められたが、本書で紹介される理論は、他の著書に詳しく解説されている標準理論の概説に過ぎない。最も簡単に表記すれば、基底部が生成した深層構造が変形操作によって表層構造となり、音声形式と論理形式への入力となる、である。

本書での基底部は、循環的に適用される有限個の句構造規則の体系である。句構造規則は終末連鎖を弱生成するので、基底部で句構造規則が語彙目録と接続することが前提となる。本書での句構造規則は

A→Z/W__Y

という書き換え規則で、WAY という連鎖の A を Z に書き換え WZY とするものである。W と Y に制限がないのが自然言語で一般的なので、A→Z で良いが、これは可逆的な規則ではない。また、句構造規則が書き換えるのは、本書では範疇記号と統語素性であり、主語や目的語などの文法的機能は [B, A] という素性で、B という接点に支配される範疇 A と定義している。これは間接的には後の構成素統御につながる。一方で、この時点では Predicate や Prep-Phrase などの記号なども残っているが、これも間接的に後の主題役割につながっている。

語彙目録も語彙の範疇や音声の素性が整理された形で書かれた文法規則の体系として、これは現在の姿がこのときに確立されている。ただ、下位範疇化が文法的規則として、選択制限が語彙目録の規則として記述され、理論として未整理になっている。

2.2. 深層構造

深層構造は、本書の理論的体系では、文の意味の表示と定義されている。まず深層構造は、構成素を範疇化したものを標識とした句構造によって構成される。本書での範疇には語彙項目と文法項目が入り、文法項目として Passive や Predicate などが含まれる。句構造は始発記号である S から開始し、構造内に補文が必要な場合は S' として再度始発記号が構造に導入される。ただし、本書では補文は主節とは別に並行して構造が生成され、書き換えのときに代入されるように説明がなされている。

深層構造は音声を決める表層構造の入力となるため、語彙項目には統語的組成の束だけではなく音韻論的弁別素性の束も記載され、深層構造において終末連鎖の1つ前の段階で書き加えられている。その後その束に応じて音声形式に書き換えられるよう、句構造規則と並行した書き換え規則が提案されている。ここを精緻化したものが、生成音韻論である。

この時期の深層構造は、統語的に精緻化された下位範疇化規則の適用を受け、現在使われていない複合記号 (Complex Symbol: CS) を含めて入念な構造が提案されている。ただし、議論が進むにつれその場限りに見える範疇記号が提案されたりする箇所があり、基底部の議論において統語と語彙目録の境界があいまいに感じられるところがあるが、当時は語彙目録も統語的規則であったことを考えればうなずける。本書の後に改定拡大標準理論の解説書を読めば、よりすっきりとした理解が可能となる。

2.3. 変形規則

本書でも、変形規則への言及は *Syntactic Structures* の頃から変わらず、 T_p と表記して受動変形を意味し、適用可能な文に適用されると説明されるのみである。構造記述 (Structural Description: SD) と構造変化 (Structural Change: SC) によってそれがどのような変形で構造をどのように変化させるのか、明示的に表されることはない。変形規則は句構造規則だけで生成できない構造を派生するのに必要、と方法論序説で主張され導入されたもので、それが深層構造に循環的に適用されて表層構造を確定すると説明されている。深層構造で付与された「読み」は構造が変わっても変更されない、とする投射規則も本書で紹介されている。これは変形操作は意味を変えない、という意味である。

また構造保持の原則は導入されてはならず、例えば受動変形は文の構造を大幅に変更する。変形規

則は、そのまま用いれば派生能力が必要以上に大きく、操作は代入、削除、付加に絞られ、置換が排除されている。一般的な生成文法の解説書では、節点を入れ替える置換変形が紹介されている場合があるが、実際はその変形操作は理解しやすい変わりに生成能力が強すぎ、もしくは理論に制限を与えるものである、ここは本書の解説のみに頼らず、後に上方移動(Raising)と下方移動(Lowering)に置き換わっていく流れを理解する必要がある。

また代入と削除が構造を変えないのに対し、一般にチョムスキー付加といわれる変形規則は、画期的ではあったが大きな構造変化を生み出すため、後の理論で扱いが改められている。理論を結果的に制限する形で、変形規則を文のどの部分に適用するか分析可能性にプール代数的条件(AND 演算)を設けて、構造的に完全に合致する場合に適用可能と定められている。

3. 本書の位置づけ

本書は、先立つ *Syntactic Structure* のように、あくまで形式的記述の理論が説明的妥当性を追及することを意図したものであるが、一方で言語普遍や言語習得の議論において、人間が生得的に持つ言語能力に言語入力に加わり、何らかの変数の設定変更により自動的に個別言語の生成文法が生み出される、もしくは人間の言語能力は経験的言語習得が説明できる以上に幅の広い文を生成できる、などの主張が大変革命的に聞こえ、当時は人工知能の研究においても本書が参考にされたほどである。本書の主張では、われわれが言語を取得できるのはわれわれが人間であるからであって、自然言語はチューリングマシンやマルコフ変換のように生成できないことは、その方面での研究の何らかの限界を示すものであるが、その後人間の言語能力の説明に関して説明的な議論をし続けていく素地となったことは評価できる。今後続く統率・束縛理論にもつながる芽が出ている主張もある。統語理論の枠組で意味論的な研究を進める良い参考書となる。

4. Charles Fillmore. *Toward a Modern Theory of Case and Other Articles.*

『格文法の原理—言語の意味と構造—』(田中春美、船城道雄訳)

1988年 三省堂、334ページ、ISBN-10: 4385300852

本書は、Fillmore による1969年から1971年に執筆された初期格文法の論文集を翻訳したものです。格文法という言葉自体、聞いたことがあるけど、内容はよく分からないという方も多いかと思います。しかし、格文法の考え方は、今日のコンピュータ言語への応用のみならず、人間の認知に関わる研究等にも広く応用されており、その基本的な考え方を知るとは、言語学のみならず様々な研究者・教育者にとって有益であると思われます。

1. 格文法とは

格文法は、文の形式的規則・構造(文法)を分析するための枠組みであり、格「文法」という言葉に示されるように、文の形式的規則・構造は、動詞がどのような格(Agent, Objective, Instrumentなどの意味役割を担う名詞句)と共に起るのか(専門的にはどのような項構造を持つのか)により予測可能であるという仮定から始まっています。

単語の意味を知っていても、実際の英作文では、単語の使い方がよく分からず、文法的に正しい英

文が書けないということは、学習の初期には誰でも経験したことがあると思います。これは、単語を含む言語の構造と、そこに適用される規則に関する知識が不足しているためであるといえます。

文は単語を組み合わせたものですが、その組み合わせ方には規則があり、その規則は構造により根拠づけられています。例えば

1. The window broke.

とは言えても、

2. John broke.

は英語として不自然です。共に [[名詞句], break [+past]] という構造をしているにもかかわらず、2 はなぜ不自然なのでしょう？ 答えは、格文法的に答えるならば、break という動詞に対して不適格な意味役割を持つ名詞句が選択されているからです。

意味役割とは、単語間の関係を表すものです。例えば、3a～3c はすべて「[A] の [B]」という同じ形をしていますが、A と B の関係はそれぞれ異なります。

- 3a. [太郎] の [恋人]
- b. [二次元] の [恋人]
- c. [理想] の [恋人]

3a は太郎と恋人との関係を表すのに対して、3b は恋人の属性、3c は「A である B」という意味関係を表します。これらの例（「[A] の [B]」）における、[A] が表す意味を「意味役割」と呼びます。

次の例を考えてみましょう。

- 4a. The door will open.
- b. He will open the door.

4 において the door は、4a では自動詞の主語、4b では他動詞の目的語です。この二つの the door は表層的に（形式的に）異なる文法機能をもつにもかかわらず（主語と目的語）、名詞の the door と動詞 open における意味的な関係には共通性があります。つまり、the door に意味役割を与えるならば、4a、4b とともに動詞 open の対象格（動作が及ぶ対象）という、同じ意味役割を担っています。ここから、文の要素には表層上の主語や目的語のような文法関係とは別の、意味関係が存在すると考えることができます。格文法は、文の構造をこのような意味関係の組み合わせのパターンから導き出します。

2. 格文法の位置づけ

格文法は生成文法の流れを汲んでいます。生成文法は、Chomsky の『文法の構造』(Syntactic Structure) に始まりますが、その後 Katz-Postal (1964) の『言語記述の統合理論』(An Integrated Theory of Linguistic Descriptions)¹を経て、『文法理論の諸相』(Aspects of the Theory of Syntax、本稿前項（藤内担当）参照)において標準理論(Standard Theory)へと発展していきます。

標準理論以降は、意味解釈がどのレベルで行われるかにより理論的立場が分かれていますが、格文法も

¹ 文の意味解釈は深層構造に基づいて意味部門で行われ、意味部門には、語彙に意味を与える辞書と、深層構造を形成する文法関係から成り立っており、表層構造を作る変形は、意味を変化させないと考えられています。

当初は Chomsky (1965) で提示された標準理論をもとに、この理論を修正する形で提案されます。標準理論では、文法体系は統語部門が意味部門と音声部門を仲介する形で存在します。統語部門には、さらに基底部門と変形部門が下位部門として存在し、基底部門に含まれる語彙目録と範疇規則により深層構造が生成され、文の意味が規定されます。さらに、この深層構造に変形部門が変形規則を適用し、表層構造に写像されることにより、いわゆる皆さんが普段使う形の英文が作られることになります。したがって、主語、述語という文法関係も、深層構造をもとに表層構造に示されたものとなりますし、意味解釈は深層構造の情報のみに基づいてなされることになります²。

それに対して、初期の格文法では、深層構造に表された文法関係は意味解釈を直接与えるものではないと仮定し、意味解釈のためのレベルを新たに仮定しています。このレベルにおいて、名詞句の持つ意味機能である格及び、述語動詞がもつ項構造（意味役割のリスト）が示され、これに基づき基底レベルでの文構造と意味が決まると考えられています。

具体的には、深層構造が作られる前に、「深層格 (deep case)」³とよばれる、動作主・場所・道具のような意味役割を担う名詞を中心とした単語が動詞により選択され、文の意味構造の「骨格」⁴が作られます。格には義務的なものと随意的なものがあり、義務的な格を削除すると非文法的になります。例えば Tom gave. が非文法的なのは、義務的な格を動詞 gave がとっていないためです。

しかし、その後の研究でこのような意味役割のみで、文の意味構造を記述することは不十分であることに加え、意味役割という概念自体が、文脈に依存するものであることから、言語外知識の必要性も指摘されるようになり、1970年代から1980年代にかけて、格文法はフレーム意味論へと発展していきます。

3. 本書におさめられている論文

本書には6本の論文がおさめられています。「現代の各理論を目指して」(1966)では、標準理論をもとに、主語や目的語のような文法関係が意味解釈に直接関与しないと仮定し、文法を意味機能を中心とした格により説明しようと試みており、その後格文法に発展する枠組みが素描されています。翌年に書かれた「Hit と Break の文法」(1967)では、語（具体的には hit と break）がもつ複数の意味は格フレームの違いであることを指摘しています。続く「格の症例」(1968)では、これまでの研究成果を踏まえ、格文法の枠組みが具体的に示されることになります。

「動詞の語い記載項目」(1968)は、従来論理学で説明できなかった述語の記述を格文法がいかに解決するかを示したものであり、「語い情報の種類」(1968)で、述語（動詞）の結合価を記述するために必要な格を補足します。「格文法の諸問題」(1971)では、研究の進展とともに、分析的視点が生成意味論の立場に近くなっており、当時の言語学の理論的潮流の影響を垣間見ることができます。

格文法の考え方は、今日でも様々な分野に影響を与えていますが、教育においてもその価値は計り

² 詳しくは、渡辺 (2015)『生成文法』東京大学出版会、等参照のこと。

³ 意味関係を表す深層格はすべての言語に共通して存在するものと考えられ、そこから人間の認識の型を表すフレームの概念へと拡張されていきます。それに対して主語、目的語や、日本語の格などの表層格は、各言語固有の表現体系を持つと考えられています。従って、深層格は言語間で共有していますが、それを形式的に表現する表層格が言語ごとに異なるために、言語によって同じ意味を表していたとしても文の構造が異なることになります。主な深層格には、動作主格 (Agent)、経験者格 (Experiencer)、道具格 (Instrument)、対象格 (Object) などがあります。

⁴ この「骨格」は「格フレーム」と呼ばれています。

知れないものがあります。母語とは異なる言語を学習する際、外国語特有の考え方、表現など、否応なく突き当たってしまう問題について、格文法は一つの解答を明確に提示してくれます。その意味において、本書は言語学を専門としない方々にもお勧めしたい一冊です。

5. 河村茂雄著『教師のためのソーシャルスキル—子どもとの人間関係を深める技術—』

誠信書房 2002年 ISBN: 4-414-20212-4 p. 175

近年、“学級崩壊”や“授業が成立しない”などの問題が指摘されている。この問題の一要因として、教師の対応の仕方が子どもの実態に合っていない、つまり、ズレが生じていることが挙げられている。その結果、教師の意図通りに子どもに伝わりにくく、対応の仕方や内容が空回りしている可能性がある。このことについては、経験年数に関係なく起こりうることでありと指摘されている。

この問題に対し、本書では、“自分の思いを、適切な言葉や態度にして、相手に伝える技術”、“個性ある思いや考えを、周りの人に抵抗なく伝える技術”である“ソーシャルスキル”に着目し論じられている。第1章から第5章までの章立てで構成されており、第1章は“ソーシャルスキルの必要性”、第2章は“子どもの実態”、第3章は“ソーシャルスキルの実践法”、第4章は“適切な対応ができない要因”、第5章は“学級集団との関連”について、それぞれ取り上げられている。今回は、第1章から第3章を取り上げて紹介する。

第1章では、ソーシャルスキルの必要性について論じられており、良好な対人関係を形成するためのポイントとして、①相手がどのような人かを理解し、②自分の思いを、相手が理解できるような言葉や態度にして、③適切に相手に伝える、ことが重要であるとしている。さらに、現代社会において、“相手のことを察する”ということができにくくなってきていることや、学校社会の教師と子どもは違う世代の者同士のため、相手のことを察することがより難しい現状があると指摘されている。そのため、上記の①～③のポイントを踏まえた接し方、すなわち、ソーシャルスキルの考え方で子どもに接することが求められていることを示唆している。

第2章は、子どもの実態についてである。第1節において、著者の調査結果を紹介しており、近年の子どもの特徴として、“飽きっぽい”、“傷つくことに過敏で、失敗することを恐れる”、“周囲に流されやすく、多数派になびく”、“集団生活のマナーを理解していない”などが報告されている。この背景には、日本の社会の大きな変化が影響を与えている可能性があるため、教師が子どもの言動や態度、心情を察することが難しくなったのではないかと指摘している。そのため、教師は子どもの発想や感覚が、自分との感覚などと若干ズレていることを受け入れる必要があると述べている。

第2節では、子どもが教師の指導や指示に従う、注意や叱責に耳を傾ける理由について、“勢力資源”という観点から説明をしている。勢力資源とは、子どもが教師に付与する勢力であり、代表的な要因として次の六つの種類がある(p. 28)。

- ①準拠性：教師に対する尊敬、信頼感など、内面的な人間的魅力にもとづく
- ②親近・受容性：親近感や被受容感など、内面的な人間的魅力にもとづく
- ③熟練性：教え方の上手さや熱心さなど、教育技術の高さと熱意にもとづく
- ④明朗性：性格上の明るさや、かかわることで楽しい気分になることにもとづく

⑤正当性：「教師」という役割や地位にもとづく

⑥罰・強制性：指示に従わないと罰せられそれを避けるために教師の指示に従うことにもとづく

そして、小学生、中学生、高校生では、教師の勢力資源の捉え方に特徴があることを指摘しており、本稿では、中学生と高校生の捉え方について紹介する。

中学生は、準拠性と親近・受容性からなる“教師の人的魅力”、熟練性と正当性からなる“教師役割の魅力”、“罰・強制性”に統合して教師を捉える傾向がある。そのため、中学生が“教師の人的魅力”と“教師役割の魅力”の勢力資源を教師に強く感じているとき、生徒はその教師の指導に、素直に進んで従おうとすると指摘している。一方で、いずれの勢力資源を感じられない教師には、強く反発し指示や注意を聞かないなどの行動に出てしまうと述べている。

高校生は、準拠性、親近・受容性、正当性からなる“教師の人的魅力”、熟練性と明朗性からなる“教師役割の魅力”、“罰・強制性”に統合して教師を捉える傾向がある。高校生が教師を捉えている視点も中学生とはほぼ同様であるが、決定的な違いとして、中学生は教師の授業の教え方のうまさや熱心さをみて“教師らしい”と感じるのに対して、高校生は教師の人的な部分に“教師らしさ”を感じていることを指摘している。そして、授業内容をおもしろく、意欲的に取り組めるようにアレンジし、時には自分の人生観を織り交ぜながら語る教師に、高校生は強い魅力を感じることを示唆している。

上記の実態を踏まえ、第3節では、子どもを理解する上でのポイントについて紹介している。まず、教師が感じている近年の子どもの実態のキーワードは、“精神的な弱さ”、“幼児的な自己中心性”、“対人関係が不得手”、“精神的に幼い”であり、これらを前提にすることの必要性を指摘している。そして、教師の勢力資源の枠組みで考えると、次のような展開が求められると述べている。まず、“教師の人的魅力”が基盤となり、特に、親近・受容性を感じさせる対応が求められる。次に、“教師役割の魅力”の勢力を背景にした対応であり、教え方の上手さ、熱心さを感じさせる熟練性を感じさせることが重要である。最後に、教師と子どもとの間に、ある程度の親密な関係ができるまでは、“罰・強制性”の勢力を背景にした対応は、できるだけ用いられないことが求められると示唆している。

第3章では、ソーシャルスキルの実践法について紹介されており、教師の思いを適切に子どもに伝えるためには、子どもの実態に合わせて、教師の側が工夫をして対応することが求められる、としている。その上で、例えば、教師の人的魅力や教師役割の魅力を十分に持っていたとしても、それが子どもに伝わらなければ意味がなく、子どもに伝えるためには、教師のソーシャルスキルが重要になってくると指摘している。教師の勢力資源を子どもに伝えるための、具体的な実践法として、次の対応例が紹介されている。

“教師の人的魅力”を背景にした対応例

- ①子どもの存在を尊重する
- ②自分から子どもに話かける
- ③子どもが話しかけやすい雰囲気意識して作る
- ④プラス志向のフィードバックをする

“教師役割の魅力”を背景にした対応例

- ①子どものマイナスと感じられる内容が表面化しないように、事前に具体的な対応をする
- ②放っておけば、子どもがそのような傾向の行動や態度にいたってしまう環境を作らない
- ③叱責する前に丁寧に教える
- ④最初の実態から少しでも成長が見られたらほめる

“罰・強制性”を背景にした対応例

- ①諸活動を実施する意味、理由を事前にしっかり説明する
- ②一貫性をもち、規則的に行う
- ③子どもが取り組む意欲を失わないうちに、結果的に、やってよかったという充実感を得られるような展開にする

上記の対応例は、小学生、中学生、高校生に共通していることであり、教師が子どもの言動や、その背景にある心情を適切に察して、両者の関係を良好に形成していく必要性を述べている。

教師の仕事は、授業、進路相談、教育相談、集団活動、学級経営、など非常に多岐に渡っている。しかしながら、これらの共通点として、教師と子どもの人間関係が前提になっていることを指摘することができる。そのため、どんなに素晴らしい教育実践を展開しても、子どもと良好な人間関係が形成できていなければ、その効果は低減してしまうだろう。本書は、このことを示唆しているとともに、自身の教育実践を振り返るきっかけや、教職を志す学生の一助になると思われる。今回は紹介できなかったが、第4章、第5章も、教師が子どもや学級集団に対応する上で、示唆に富んだ内容となっているため、一読することをお勧めしたい。